

大学生の友人関係の親密化過程に 及ぼす個人差要因の影響^{1) 2)}

山 中 一 英³⁾

問 題

近年、従来の未知の他者に対する対人魅力研究の知見を基盤にして、現実の対人関係の親密化過程に関する研究の必要性が叫ばれている(和田・廣岡・林, 1986)。

山中(1994)は、大学生の友人関係の親密化過程が、社会的浸透理論(Altman & Taylor, 1973)に従い段階的に分化していくのか、それとも関係性の初期分化現象(Berg & Clark, 1986; 中村, 1989)を示すのかを縦断的データをもとに検討している。それによれば、出会ってわずか2週間というきわめて短期間のうちに、約2ヶ月半後の関係の親密さを予測できる関係の分化が生起していることが明らかとなっている。

さらに、山中・廣岡(1994)も、山中(1994)とは別の被調査者を対象として検討したところ、約8ヶ月後という長期的な関係においても、出会ってわずか2週間でも予測することが可能であることを見出している。

以上の研究が示しているように、大学生を対象とした場合、将来の関係の性質に関する分化は出会ってきわめて短期間のうちになされ、その分化が後々の時点まで持続的に影響を及ぼしているようである。このことから、大学生の友人関係の親密化過程は関係性の初期分化現象を示すと判断できる。

ところで、友人関係の親密化過程とパーソナリティ変

数などの個人差要因との関連性は十分に予想されることであるにもかかわらず、それを扱った研究はそれほど多く行われてきていない。たとえば、Hays(1985)は、新学期開始から3週間経過した第1時点で評定された“新たな友だちをつくりたいという動機づけ”は、新学期開始から12週間後の第4時点で評定された“友人関係の強さ(friendship intensity)”と正の相関をもっていたが、“シャイネスの程度”はそれと有意な相関をもっていなかったことを示している。また、中村(1989)は、男性の場合、入学から約1ヶ月後の第1時点における関係関与性は回答者自身の対人的志向性(interpersonal orientation)の高さによって規定される可能性を示唆している。このように数少ない研究例は存在するものの、友人関係の親密化過程そのものに関する縦断的な研究さえ十分に行われてきていない現状では、友人関係の親密化過程と個人差要因との関連性についての実証的な知見が十分に蓄えられているとは言い難い。

また、上述したように、親密化過程が段階的分化説に従うのか初期分化説に従うのかという点に関しては、大学生の友人関係の親密化過程は初期分化説を支持する証拠を示してきている。ただし、初期分化するとはいえ、将来の親密化の状態を安定して分化させる時期がその初期の中でも個人差要因によって異なることは十分に予想されることである。そこで、本研究では、全体としては関係性の初期分化現象を示すと考えられる、大学生の友人関係の親密化過程に及ぼす個人差要因の影響を検討することを目的とする⁴⁾。

本研究で取り上げる個人差要因は以下の2つである。まず第1に、社会的スキルである。対人関係を円滑にはこぶための技能のことを社会的スキルという(菊池, 1988)。和田(1991)によれば、女性の場合、大学内外を問わず友人数と社会的スキルの一つである関係開始スキルとは正の相関をもち、関係開始スキルがあるほど友人数が多いことを明らかにしている。こうした結果からも、社会的スキルが友人関係の親密化過程に影響を及ぼ

1) 本研究は、筆者の修士論文(1992年度、名古屋大学)のデータの一部を再分析、加筆修正したものである。

2) 本研究の一部は、日本グループ・ダイナミックス学会第41回大会で発表されている。

3) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生

4) 本研究は、山中(1994)と同じ被調査者を分析対象としている。したがって、データ全体としては関係性の初期分化現象を示している。しかし、ここでは扱われなかった個人差要因との関連性を検討するものである。

している可能性が十分に考えられる。第2に、信頼感である。山岸ら(1995)が我々の生活において信頼(trust)のはたしている役割はきわめて大きいと記しているように、信頼感是人と人が相互作用する際の基本となるものであると考えられる。本研究では、信頼感を「人間は基本的に正直で信用できるものであると期待すること」と定義し、友人関係の親密化過程との関連を検討する。

方法

被調査者

国立N大学において心理学を受講する1年生。4回の調査において、想起した対象人物として記入させたイニシャルが4回ともまったく同一であった被調査者のみを有効被調査者として分析対象とした。有効被調査者は94名(男性43名,女性51名)であった。ただし、欠損値が存在するため分析によって対象となった被調査者数は異なっている。

調査実施時期

第1時点の調査は入学式の1週間後の1992年4月15日(授業開始日)、第2時点は入学式の2週間後の4月22日、第3時点は入学式の4週間後の5月6日、第4時点は入学式の約2ヶ月半後の6月24日に実施された。個人差変数に関する測定は、社会的スキルが第1時点に、信頼感が第4時点に実施された。調査はすべて同一の心理学講義の時間に実施された。

手続き及び質問紙の構成

“大学入学前はお互いに見ず知らずで、入学後知り合い、時間が経つにつれて、良い友人になりそうだと思う同性の人物を頭に思い浮かべてください”という教示のもとに(第1時点のみ)、対象人物を想起させた。さらに、質問紙にその人物のイニシャルを書かせた上で、以下に示す尺度項目に回答させた。

(1) 関係の親密さ

好意度

“現時点で、あなたは対象人物に対してどの程度好感を持てますか”について、「まったく好感が持てない=1点」から「非常に好感が持てる=7点」までの7段階で評定させた。

関係関与度

“現時点で、あなたは対象人物と、どの程度深く関わっていると思いますか”について、「非常に浅く関わっている=1点」から「非常に深く関わっている=7点」ま

での7段階で評定させた。

関係のラベリング

“現時点で、あなたは対象人物と、どの程度親しいですか”について7段階で評定させた。なお、評定尺度上には、「顔や名前を知っている程度の友人=1点」、「会えば話をする程度の友人=3点」、「ある程度親しい友人=5点」、「最も親しい友人=7点」といった関係のラベルが示されていた。2, 4, 6点には何も示されていない。

(2) 個人差変数

社会的スキル

和田(1991)によるソーシャルスキル尺度を用いた。この尺度は、“親密な友だちが落ち込んでいる時、支援するために何かを言ったり、してあげることができる”、“知合いになりたいと思った同性の人に自分を売り込むことができる”、“私に対する友だちの扱い方が気に入らなければ、そのことを彼らに話す”などの29項目からなり、各々の項目を「まったくあてはまらない=1点」から「非常にあてはまる=5点」までの5段階で評定させた。社会的スキルがあるほど高得点になるようにした。

信頼感

Rotter(1967)、Yamagishi & Sato(1986)などをもとに山科(1988)⁵⁾が作成した尺度のうち5項目を用いた。この尺度は、“ほとんどの人は基本的に正直である”、“その人をよく知るまでは、他人を信用すべきではない”などの項目からなり、各々の項目を「まったくそう思わない=1点」から「非常にそう思う=7点」までの7段階で評定させた。人間を信頼しているほど高得点になるようにした。

結果

1. 友人関係の親密化過程に及ぼす社会的スキルの影響

本研究においては、二者関係の親密さの基準として、好意度、関係関与度、関係のラベリングの3項目の平均評定値をもって関係親密度得点とした。そして、出会って約2ヶ月半後の第4時点における関係親密度得点の中央値(5.33点)を基準として中央値以上を関係親密群、

5) 本稿で記された調査実施時点では、この尺度は信頼感を測定する十分に妥当な尺度であると判断された。その後、山岸らによる信頼感に関する一連の研究(たとえば山岸ら,1995)においては、新たに信頼感尺度が作成されている。

中央値未満を表面的関係群として設定した。

社会的スキル尺度を因子分析（主因子解・バリマックス回転）した結果、和田（1991）と同じく3因子構造をなしていると考えられた。3つの因子は、『関係維持（ $\alpha = .83$ ）』、『関係開始（ $\alpha = .85$ ）』、『自己主張（ $\alpha = .79$ ）』と解釈された。

「関係維持」尺度10項目の平均評定値をもって尺度得点とした。得点が高いほど、関係維持スキルがあることを意味する。その尺度得点の中央値（3.5点）を基準として、中央値以上を維持スキル高群、中央値未満を維持スキル低群として設定した。なお、各群の被調査者数は、親密関係・維持スキル高群34名、親密関係・維持スキル低群14名、表面的関係・維持スキル高群21名、表面的関係・維持スキル低群24名であった。そして、第4時点の関係（2）×関係維持スキル（2）の分散分析を第1時点の関係親密度得点について行った。結果は、第4時点の関係の主効果が有意であった（ $F(1, 89) = 12.30, p < .001$ ）以外に有意な結果は認められなかった。さらに、第4時点の関係（2）×関係維持スキル（2）×時点（4）の分散分析を行ったところ、第4時点の関係×時点が有意（ $F(3, 267) = 28.11, p < .001$ ）、関係維持スキルの主効果が有意傾向（ $F(1, 89) = 3.01, p < .10$ ）であった。関係親密度の平均評定値の時系列的变化をFigure 1に示す。全体的に、関係維持スキルが高いと認知しているものの方が関係親密度得点が高い傾向がうかがえる。しかし、この結果は本研究の文脈で

は興味深いものではない。

「関係開始」尺度8項目の平均評定値をもって尺度得点とした。得点が高いほど、関係開始スキルがあることを意味する。その尺度得点の中央値（2.8点）を基準として、中央値以上を開始スキル高群、中央値未満を開始スキル低群として設定した。なお、各群の被調査者数は、親密関係・開始スキル高群25名、親密関係・開始スキル低群23名、表面的関係・開始スキル高群21名、表面的関係・開始スキル低群24名であった。そして、第4時点の関係（2）×関係開始スキル（2）の分散分析を第1時点の関係親密度得点について行った。結果は、第4時点の関係×関係開始スキルの交互作用が有意傾向にあった（ $F(1, 89) = 3.83, p < .10$ ）。さらに、第4時点の関係（2）×関係開始スキル（2）×時点（4）の分散分析を行ったところ、第4時点の関係×関係開始スキル×時点の交互作用が有意であった（ $F(3, 267) = 2.95, p < .05$ ）。関係親密度の平均評定値の時系列的变化をFigure 2に示す。関係開始スキルが低いと認知している群では、第1時点ですでに将来の関係の分化に相当する分化が明確になされていることがわかる。対照的に、関係開始スキルが高いと認知している群では、第1時点の関係親密度は親密関係群も表面的関係群も比較的接近しており、時間の経過に伴い両群が分化していく様子が読みとれる。要するに、関係開始スキルが高いと認知している人よりも、関係開始スキルが低いと認知している人の方が、より早期に関係を分化させている可能性

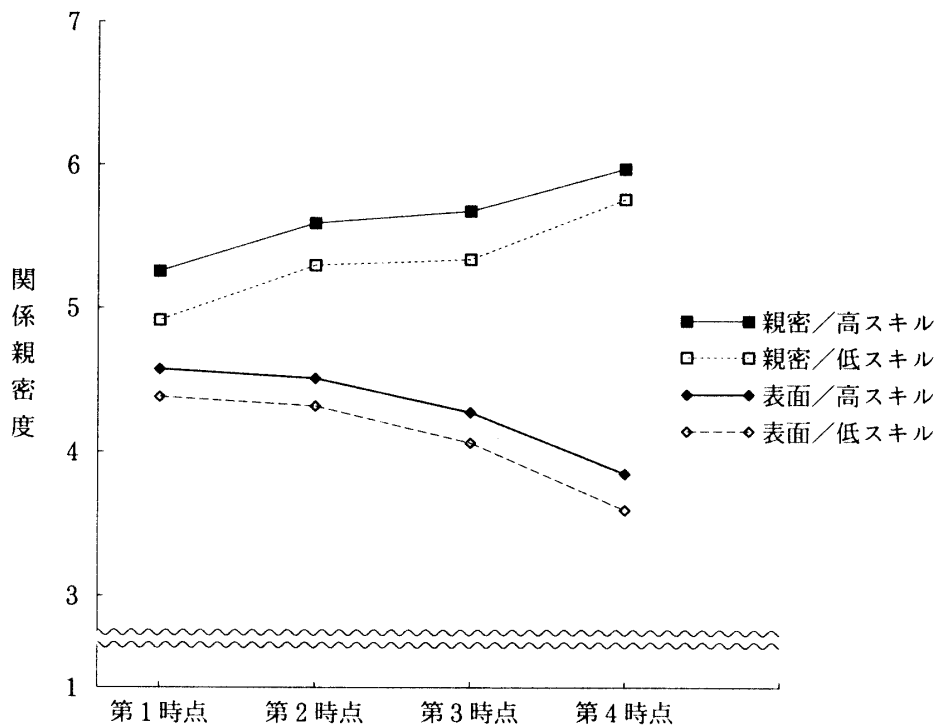


Figure 1 友人関係の親密化過程に及ぼす関係維持スキルの影響

大学生の友人関係の親密化過程に及ぼす個人差要因の影響

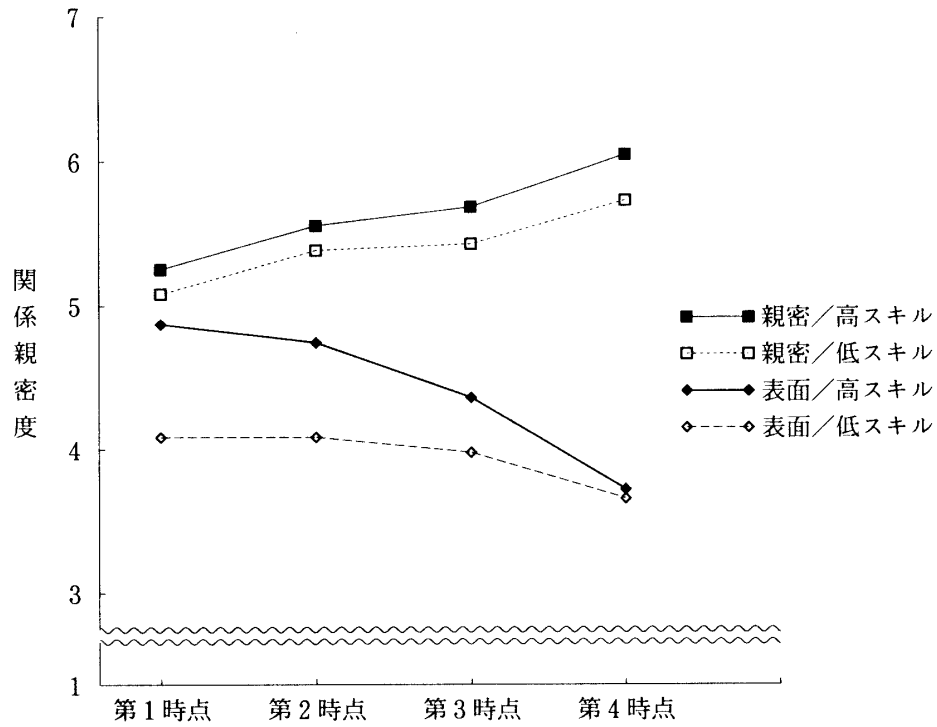


Figure 2 友人関係の親密化過程に及ぼす関係開始スキルの影響

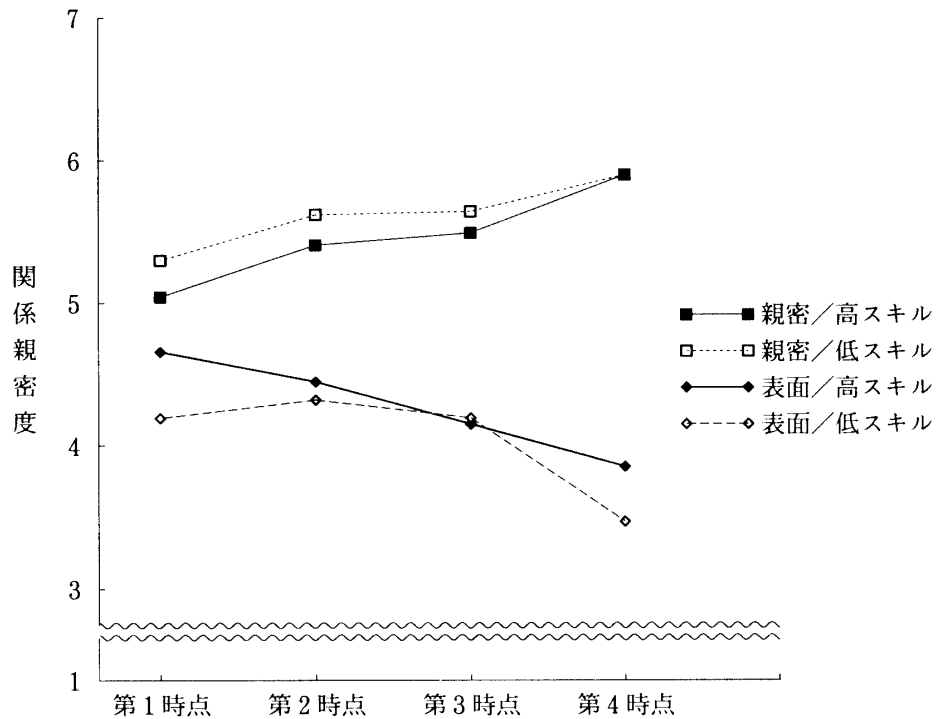


Figure 3 友人関係の親密化過程に及ぼす自己主張スキルの影響

が示されたのである。

「自己主張」尺度5項目の平均評定値をもって尺度得点とした。得点が高いほど、自己主張スキルがあることを意味する。その尺度得点の中央値(2.8点)を基準として、中央値以上を自己主張スキル高群、中央値未満を

自己主張スキル低群として設定した。なお、各群の被調査者数は、親密関係・自己主張スキル高群27名、親密関係・自己主張スキル低群21名、表面的関係・自己主張スキル高群25名、表面的関係・自己主張スキル低群20名であった。そして、第4時点の関係(2)×自己主張スキ

資 料

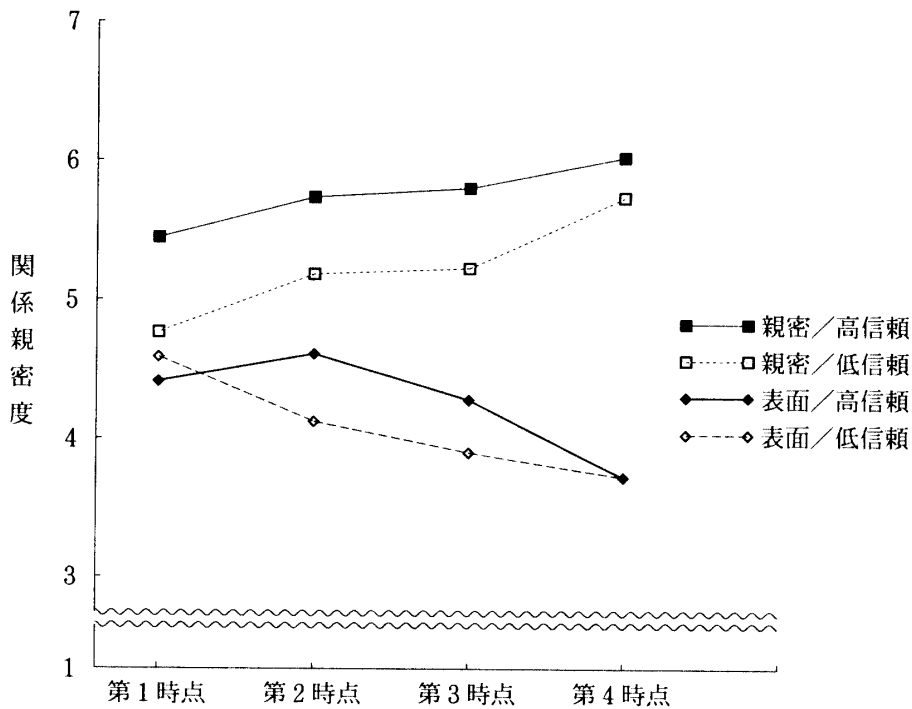


Figure 4 友人関係の親密化過程に及ぼす信頼感の影響

ル(2)の分散分析を第1時点の関係親密度得点について行った。結果は、第4時点の関係×自己主張スキルの交互作用が有意であった ($F(1, 89) = 4.02, p < .05$)。さらに、第4時点の関係(2)×自己主張スキル(2)×時点(4)の分散分析を行ったところ、第4時点の関係×時点の交互作用が有意であった ($F(3, 267) = 30.30, p < .001$)。関係親密度の平均評定値の時系列的变化を Figure 3 に示す。自己主張スキルが高いと認知している群では、第1時点では親密関係群も表面的関係群も比較的關係親密度得点が接近していることがわかる。一方、自己主張スキルが低いと認知している群では、第1時点ですでに将来の関係の分化が生起していることが読みとれる。そして第2時点以降は自己主張スキルの高低によって有意な差は認められなくなる。要するに、自己主張スキルが高いと認知している人よりも、自己主張スキルが低いと認知している人の方がより早期に関係を分化させている可能性が示されたのである。

2. 友人関係の親密化過程に及ぼす信頼感の影響

信頼感尺度を因子分析した結果、単因子構造をなしていると考えられた。信頼感尺度5項目の α 係数を算出したところ、.81という高い値が得られ、内的一貫性は高いと考えられる。5項目の平均評定値をもって、信頼感尺度得点とした。得点が高いほど人間は基本的に正直で信用できるものであると考えていることを意味する。その得点の中央値(4点)を基準として、中央値以上を高

信頼群、中央値未満を低信頼群として設定した。なお、各群の被調査者は、親密関係・高信頼群27名、親密関係・低信頼群21名、表面的関係・高信頼群25名、表面的関係・低信頼群19名であった。そして、第4時点の関係(2)×信頼感(2)の分散分析を第1時点の関係親密度得点について行った。結果は、第4時点の関係×信頼感の交互作用が有意であった ($F(1, 88) = 6.46, p < .05$)。さらに、第4時点の関係(2)×信頼感(2)×時点(4)の分散分析を行ったところ、第4時点の関係×信頼感×時点の交互作用が有意傾向にあった ($F(3, 264) = 2.22, p < .10$)。関係親密度の平均評定値の時系列的变化を Figure 4 に示す。人間を信頼できると考えている人と比較して、人間を信頼できないと考えている人は、相対的に、第1時点で将来の関係の分化に相当する分化を生起させていないことが読みとれる。つまり、人間を信頼していない人よりも、人間を信頼している人の方がより早期に関係を分化させている可能性が示されたのである。

考 察

1. 友人関係の親密化過程に及ぼす個人差要因の影響に関する考察

関係性の初期分化現象を示すと考えられる大学生の友人関係の親密化過程にいくつかの個人差要因が影響を及ぼしていることが示された。つまり、将来の友人関係の親密化可能性は出会いの初期にすでに決定されてしまう

が、将来の親密化の状態を安定して分化させる時期は、その初期の中でも個人によって異なっていたのである。

まず、社会的スキルの下位尺度である関係開始スキルの認知が友人関係の親密化過程に影響を及ぼしていることが示された。Figure 2において示されているように、関係開始スキルが高いと認知している人に比べ、関係開始スキルが低いと認知している人は第1時点からすでに関係を分化させている。この結果に関して次のように考察できる。関係開始スキルが高いと認知している人は、新たに人物と出会ったとき、自分には新たに友人関係を開始する技能が備わっていると思っているので、おそらくこの人物とも親密になれるであろうと最初は考えたのであろう。そのため、将来親密にならなかった人も親密になった人と同じような程度に関係親密度を評定したのではないかと考えられる。

そして、自己主張スキルもまた友人関係の親密化過程に影響を及ぼしていることが示された。Figure 3において示されているように、自分は自己主張スキルが低いと認知している人の方が第1時点ですでに将来の関係の分化に相当する分化を生起させている。この結果は次のように考察することが可能である。自己主張スキルが高いと認知している人は、自分の考えなどを主張し、相手との相互作用を通してその人との関係の性質を決定していくというスタイルをもっていると考えられる。そのため、相互作用が十分でない第1時点では将来親密になった人もなかった人も関係親密度をほとんど同じような程度に評定したのではないだろうか。

次に、人間は基本的に正直で信用できるものであるという信頼感が友人関係の親密化過程に影響を及ぼしている可能性が示唆された。Figure 4において示されているように、人間を信頼できると考えている人と比較して、人間を信頼できないと考えている人は、相対的に第1時点で関係の分化がなされていない。この結果は次のように考察できる。人間を基本的に正直ではなく信用もできないと思っている人は、出会ってわずか1週間の時点では対象人物は真の姿をあらわしていないと考え、約2ヶ月後半親密な関係へと進展した人も表面的な関係にとどまった人もほとんど同じような程度に関係親密度を評定したのではないかと考えられる。一方、人間は基本的に正直で信用できると考えている人は、たとえ出会って1週間の時点でも対象人物は真の姿をあらわしていると考え、関係親密度を評定しているので、1週間の時点ですでに将来の関係の分化をあらわすような評定を行ったのであろうと考えられる。

ところで、社会的スキルと信頼感との関連性を検討するために、尺度間の相関係数を算出してみた。その結

果、関係維持スキル尺度と信頼感尺度 ($r = .16$)、及び関係開始スキル尺度と信頼感尺度 ($r = -.09$)の間はそれぞれ有意ではなかったが、自己主張スキル尺度と信頼感尺度とは有意な負の相関が認められた ($r = -.24$, $p < .05$)。この結果は、社会的スキルと信頼感との概念的な関連性を検討する必要性を示しているものであると考えられ、尺度の精度の問題を含め、今後検討しなければならない課題の一つであると思われる。

2. 関係性の初期分化現象に関する理論的考察

本研究で得られた結果から、関係性の初期分化現象、及びその生起理由について理論的に考察してみたい。まず、関係開始スキル、自己主張スキルなどの社会的スキルを相対的に備えていないと認知している人の方が、関係分化がより早期になされるという結果が得られた。この結果から次のような考察が可能となるであろう。社会的スキルを備えていると認知している人と比較して、社会的スキルを備えていないと認知している人は、対人関係を終結させる際にかかるコストが大きくなると考えられる。終結コストが大きければ、相互依存性理論 (Thibaut & Kelley, 1959) でいうところの選択比較水準 (comparison level for alternatives ; CLalt) が低く抑えられることになる。CLaltの低さは現有関係の維持にとって一つの重要な条件になる (長田, 1987)。つまり、CLaltが低下した場合、現有関係をどうしても維持していきたい、あるいは維持しなければならないとさえ思うと考えられる。本研究において、社会的スキルを備えていないと認知した人の方が関係分化がより早期になされることになった理由には、こうした原因を指摘することもできよう。

ここで、もう少し議論を展開させてみると、大学入学直後という状況の特殊性を考慮したとき、CLaltの低下は社会的スキルを備えていないと認知している人に限ったことではないようにも思われる。なぜなら、大学入学直後は、自分の周囲の大半が未知者であるため、代替となる関係が限定された状況である。これは、CLaltの低下を意味しているに他ならないからである。つまり、CLaltの低下が関係性の初期分化現象を生起させる要因の一つである可能性を示唆している。そこで、CLaltの低下という点を考慮しながら関係性の初期分化現象の生起するプロセスを推察してみよう。まず、大学入学直後は友人関係形成への動機づけが高まっている状態であると考えられる (諸井, 1986など)。面接法を用いた質的アプローチによって友人関係の親密化過程を検討した山中 (1995) において、面接の冒頭での「大学生活を始めてどんなことがたいへんですか」という質問に対して、

即座に「人間関係をつくること」と答えた被面接者の存在が記されていることからその様子がうかがえる。ところが、大学入学直後は CLalt が低下した状況である。高校から一人しかその大学に入学していないという例を考えれば明らかであろう。つまり、大学入学直後は、友人関係形成への動機づけが高まっている状態であるにもかかわらず、CLalt が低下した状況である。そのため、ひとたび成立させた友人関係は何とかして維持していこうとするのであろう。このようにして、関係が初期に分化し、その分化が維持されていくと考えることができる。CLalt の低下は、関係性の初期分化現象を考える上で、きわめて重要な要因であると言えよう。

また、人間を正直で信用できるという信頼感をもって人の方が関係分化がより早期に行われるという結果は、自己成就的予言という現象に関わってくると考えられよう。関係性の初期分化現象の生起理由としての自己成就的予言に関しては、山中(1994, 1996)でもすでに記されていることであるが、本研究で得られた信頼感に関する結果も自己成就的予言と関連させて説明することが可能である。というのは、あくまでも推論の域を脱するものではないが、人間を信頼できると思っている人ほど自己成就的予言が生起しやすいと考えられるからである。周知の通り、Merton(1948)によって自己成就的予言と呼ばれた現象は、他者について抱いた期待がいつしか現実のものとなっていく現象のことである。たとえば、ある人物と出会い、「感じのよい人」という印象をもったと仮定する。その印象が正確であるかどうかに関わらず、相手を感じのよい人だと思えば、しらすしらすのうちに好意的に振る舞うようになる。そうすれば、相手も好意的に接するようになってくる。それを見て、ますます好意的に相手とつきあうようになり、「やっぱりこの人は感じのよい人だ」と思うようになる。つまり予言が実現したわけである。このような自己成就的予言の過程と信頼感とを関連づけるならば次のようになるだろう。人間を信頼している人ほど、他者に対して良い印象を形成しやすくなる。そうすれば、上述したようなプロセスを経て予言が自己実現し、それが関係分化がより早期になされることにつながるのではないだろうか。ただし、この点に関してはあくまでも推察であり、何ら実証性を伴うものではない。今後の検討課題とすべきであろう。

ところで、Berg & Clark(1986)は、「初期意思決定と分化(early decision-making and differentiation)」という言葉を用い、人は新たに他者と出会うと、その他者との関係の親密化可能性に関してある意思決定をすると仮定している。本研究で得られた、個人差要因

により将来の親密化の状態を安定して分化させる時期が初期の中でも異なっていたという結果は、意思決定する時期の変動としてとらえることができるかもしれない。従来の社会的浸透理論に代表される段階的的分化説と初期分化説とが本質的に相違する点は、出会ってきわめて初期の対人関係形成期の様相が後々の時点まで持続的に影響を及ぼすか否かという点にある(山中, 1996)。換言すれば、初期分化説とは、初期意思決定が後々の時点まで重大な影響を及ぼすと仮定しているとも言えるのである。しかしながら、これまでのところ初期意思決定の存在そのものに焦点を当てた研究や、初期意思決定に影響を及ぼす要因に関する研究などはあまり行われてきていない。本研究は、個人差要因が初期意思決定に影響を及ぼす要因である可能性を示唆した点で有益なものであると考えられる。今後、こうした点を直接的に検討することが対人関係の親密化過程の解明にとってきわめて重要な課題となるであろう。

引用文献

- Altman, I. & Taylor, D. A. 1973 *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Berg, J. H. & Clark, M. S. 1986 Differences in social exchange between intimate and other relationships: Gradually evolving or quickly apparent? In V. J. Derlega & B. A. Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag. Pp. 101-128.
- Hays, R. B. 1985 A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 909-924.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- Merton, R. K. 1948 The self-fulfilling prophecy. *Antioch Review*, 8, 193-210.
- 諸井克英 1986 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, 25, 115-125.
- 中村雅彦 1989 大学生の友人関係の発展過程に関する研究(Ⅰ)—関係性の初期差異化現象に関する検討—日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集, 65-66.
- 長田雅喜 1987 対人魅力の成立と発展 大橋正夫・長田雅喜(編) 対人関係の心理学 有斐閣 Pp.

- 106-128.
- Rotter, J. B. 1967 A new scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, **35**, 651-665.
- Thibaut, J. W. & Kelley, H. H. 1959 *The social psychology of groups*. New York: Wiley.
- 和田 実 1991 対人的有能性に関する研究—ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成— 実験社会心理学研究, **31**, 49-59.
- 和田 実・廣岡秀一・林 文俊 1986 大学生の交友関係の進展に関する研究(1) 日本社会心理学会第27回・日本グループ・ダイナミックス学会第34回合同大会発表論文集, 73-74.
- Yamagishi, T. & Sato, K. 1986 Motivational bases of public goods problem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 67-73.
- 山岸俊男・山岸みどり・高橋伸幸・林 直保子・渡部 幹 1995 信頼とコミットメント形成—実験研究— 実験社会心理学研究, **35**, 23-34.
- 山中一英 1994 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, **34**, 105-115.
- 山中一英 1995 対人関係の親密化過程に関する質的データに基づく一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **42**, 127-134.
- 山中一英 1996 友人関係の親密化過程 長田雅喜(編) 対人関係の社会心理学 福村出版 Pp. 101-110.
- 山中一英・廣岡秀一 1994 大学生の対人関係の親密化過程に関する研究(4) 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 306-307.
- 山科抄織 1988 信頼感の構成についての研究 昭和63年度北海道大学文学部卒業論文(未公刊)
(1996年9月13日 受稿)

ABSTRACT

The Effects of Individual Differences on Friendship
Development among College Students

Kazuhide YAMANAKA

The purpose of this study was to investigate the effects of individual differences in social skill and interpersonal trust on friendship development among college students. Forty-three male and fifty-one female freshmen completed the questionnaires regarding their relationship with a same-sex individual with whom they had just met. They were surveyed longitudinally at week 1, 2, 4, and 11 of their first term at the university. They also answered the questionnaires for measuring social skill and interpersonal trust.

Major findings were as follows: (1) Those who were high in interpersonal trust were making decisions whether the relationship would be close earlier than those who were low in it. (2) For those who were low in social skill, the decisions about whether or not the relationship would be close were differentiated earlier. Some factors influencing early differentiation of relatedness were discussed from these results.

Key words : friendship, relationship development, social skill, interpersonal trust, longitudinal study.